

法隆寺百萬塔の調査

平城宮跡発掘調査部

法隆寺百萬塔の調査も2カ年を経過し、塔身部の調査は「特等」から「甲上」「甲」へと進み、現在までに5200基を調査した。この間、大宝藏殿収蔵の重要文化財指定品98基と十萬・一萬節塔を調査し、1984年5月には、東京国立博物館において、1988年に皇室に献納された百萬塔48基についても調査した。その結果、新たに次の点が判明した。(1)特等品1251基の内の9割以上にみられた補修痕跡が「甲上」以下の製品や重文指定品・献納物中には認められず、さらに分析の結果、補修上に塗られた白色顔料は、奈良時代当初の白土とは異なる炭酸カルシウム(貝殻胡粉)であることが判明した。したがって、補修は後世の仕事であり、その時期は法隆寺百萬塔の一部が外部に頒たれた明治末年頃と推測される。(2)塔身部・相輪部ともに二ないし三分割して製作した組立塔の製品がある。(3)1930年に梱包された百萬塔のすべてを開封し、法隆寺に現存する百萬塔の数を集計した結果、出土品を含めた総点数は45,700余基となった。

百萬塔墨書銘については、これまでに塔身部1500余基を調査した。墨書銘は塔身部では基壇底面か第三層屋蓋上面の白色顔料(白土)下に記されており、釈読には赤外線テレビを用いた。調査例全体の9割弱に墨書があり、その9割以上が底面墨書であった。墨書銘は「左景雲元年十一月一日八千万」「云二四月廿／右神秋万呂」のように一行ないし二行で簡略に記されており、「神護景雲二年六月二十九日、右、公子豊成」という内容を「云二六廿九／右豊成」と記すように、ほとんどが省略形の記載である。記載内容は①左・右の工房の別、②製作年月日、③製作工人名の三点からなり、最も短い記載では「廣」など人名の一部のみとなる。これまでの調査では、工房別の左・右の数はほぼ等しい。製作日では、神護景雲2(768)年の3月～6月の間に6割以上が集中している。工人名では、200名を超す人名が出てきており、氏姓ともに知られる者も50名近くに及んでいる。その一人の秦八千万呂の作例は、これまでに40例以上にのぼる。中には、「云二四十九／左五百足」「云二四廿三／左五百足」(写真)のように、同筆、近接した日付、同一工人名の墨書銘をともない、ロクロの爪跡痕から同一のロクロ台を用いて製作されたことのある例もある。

こうした調査によって、工人編成のあり方など百萬塔の製作工程が明らかとなり、この大事業の様相が復原できるものと思われる。

(松村恵司・佐藤 信)